

東大道遺跡 (B地区)

庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

2002年

大分県教育委員会

東大道遺跡 (B地区)



東大道遺跡B地区と中世大友府内城下町跡

序 文

県都である大分市は、古くから瀬戸内海交通を通じて、九州の東の玄関口としての役割を果たしてきました。古代では国府がおかれ、中世では南蛮貿易が行われていた当時の国際都市大友府内町として、豊後国の政治経済の中心地でありました。このため、市内各所にこうした遺跡が残されています。

またこの地は、陸上交通に比重の移った現在でも、鉄道や道路網の東九州の要衝地として重要な位置を占めており、大分県と大分市では、一体となって大分駅の高架化や駅周辺の土地区画整理事業等の総合整備事業をすすめています。

大分県教育委員会では、こうした事業と遺跡の保護との調整を図っており、本書で報告する東大道遺跡も大分駅周辺の都市交通の円滑化を図るために計画された県道庄の原佐野線建設に伴い発掘調査されたものです。本書が学術研究や地域の歴史学習のために活用できれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた関係者の方々に対し衷心からお礼申しあげます。

平成14年3月29日

大分県教育委員会教育長

石 川 公 一

例 言

- 1 本書は、大分市金池南町1丁目に所在する遺跡の報告書である。
- 2 調査は、県道庄の原佐野線建設に伴い、大分駅周辺総合整備事務所から委託され実施されたものである。
- 3 調査は坂本嘉弘と五十川雄也(大分県教育庁文化課)があたり、平成12年10月26日から開始し、平成12年12月27日に終了した。
- 4 現地での写真撮影・遺構の実測は調査員がたった。
- 5 整理作業での遺物実測・遺物写真・製図は調査員がたったほか、輸入陶磁器については吉田寛(大分県教育庁文化課)の協力を得た。
- 6 本書の執筆は第2章のSK1・SD1～4の遺構について五十川が、第2章4.(2)2)の輸入陶磁器については吉田が担当したほかは、編集を含め坂本が担当した。

目 次

第1章 はじめに	1
1. 調査の経緯	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の経過	1
(3) 調査の体制	2
2. 遺跡の立地と環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	4
第2章 調査の成果	6
1. 調査の概要	6
(1) 遺構の配置	6
(2) 基本層序	6
2. 弥生時代の遺構と遺物	9
(1) 土坑 (SK1)	9
1) 土器	9
2) 石器	10
(2) 溝	12
1) SD1	12
2) SD4	12
(3) 遺物	12
1) 後漢銅片	12
2) 姫島産黒曜石原石	12
3. 古代の遺構と遺物	14
(1) 遺構	14
(2) 遺物	14
4. 中世の遺物	15
(1) 出土状況	15
(2) 遺物	15
1) 土師器	15
2) 摺鉢	16
3) 輸入陶磁器陶器	17
4) 瓦	19
5) 煙管	19
6) 土錘	19
5. SD3	19
第3章 まとめ	20

挿 図 目 次

第1章

第1図	庄の原在野線と東大道遺跡位置図	1
第2図	東大道遺跡と周辺の遺跡	3
第3図	東大道遺跡B地区と周辺の地形	4

第2章

第4図	東大道遺跡B地区の調査区	6
第5図	東大道遺跡B地区の遺構配置と土層図	7
第6図	東大道遺跡B地区SK1実測図	9
第7図	東大道遺跡B地区SK1出土石器実測図	10
第8図	東大道遺跡B地区SK1出土土器実測図	11
第9図	東大道遺跡B地区SD1出土土器実測図	12
第10図	東大道遺跡B地区SD4出土土器実測図	12
第11図	東大道遺跡B地区出土後漢鏡片実測図	12
第12図	東大道遺跡B地区出土鉏高産黒曜石実測図	13
第13図	東大道遺跡B地区SD2出土土器実測図	14
第14図	東大道遺跡B地区包含層出土土師質土器実測図	15
第15図	東大道遺跡B地区包含層出土播鉢実測図	16
第16図	東大道遺跡B地区包含層出土輸入陶磁器実測図	18
第17図	東大道遺跡B地区包含層出土瓦実測図	19
第18図	東大道遺跡B地区包含層出土煙管実測図	19
第19図	東大道遺跡B地区包含層出土土鏃実測図	19

第3章

第20図	東大道遺跡B地区と周辺の小字名	21
------	-----------------	----

写真図版目次

写真図版巻頭	東大道遺跡B地区と中世大友府内城下町跡	
写真図版 1	東大道遺跡B地区全景 (東側上空から)	25
写真図版 2	東大道遺跡B地区遺構・遺物出土状況 (1)	27
写真図版 3	東大道遺跡B地区遺構・遺物出土状況 (2)	28
写真図版 4	東大道遺跡B地区遺構・遺物出土状況 (3)	29
写真図版 5	東大道遺跡B地区出土弥生土壘	30
写真図版 6	東大道遺跡B地区出土古代遺物	31
写真図版 7	東大道遺跡B地区出土輸入陶磁器	32
写真図版 8	東大道遺跡B地区包含層出土遺物 (1)	33
写真図版 9	東大道遺跡B地区包含層出土遺物 (2)	34

第1章 はじめに

1. 調査の経緯

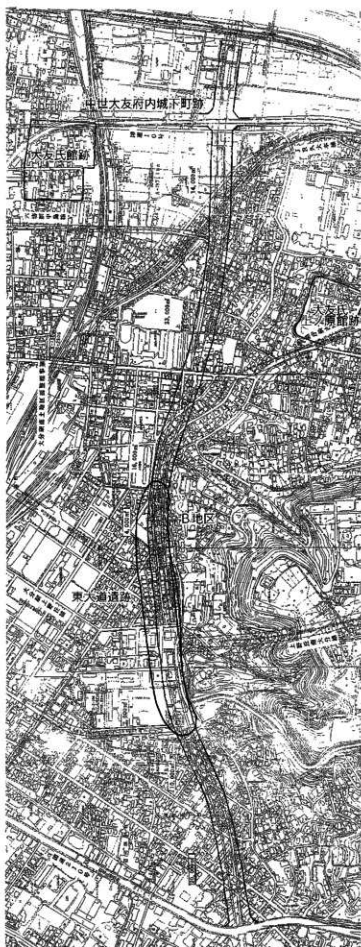
(1) 調査に至る経過

大分市の中心であるJR大分駅周辺では、駅を挟んで南側と北側では大きく様相を異にする。すなわち、北側は、商業地域として大分市の顔の賑わいを見せているが、南側は、住宅地を中心とした、閑静な地域で、一部は迷路状の細い市道も見られる。そこで、この南北両地域の格差を解消するとともに、両地域の通行をスムーズにするため、大分駅南側地域を中心に、駅の高架化や区画整理事業が、大分県と大分市が一体となり、大分駅周辺総合整備事業として計画され、実施している。

当遺跡の調査の起因となった県道庄の原佐野線の建設も、大分駅の南に西から東に延びる上野丘陵の裾に沿って計画されたもので、大分市内の交通緩和をはかるため、大分市の西部の庄の原にある大分自動車道の大分インターと、大分市の東部にある佐野地区を結ぶ新設の道路として建設されるものである。

県道庄の原佐野線建設工事は、西側から大道工区・金池工区・上野工区に分かれて土地収容が実施されている。これに伴う埋蔵文化財の調査は、この工程に従い、平成10年度は大道工区の一部の試掘調査から開始した。しかし、この年度の試掘調査では、本調査に至るような遺跡は確認されなかった。ところが、翌平成11年度の試掘調査では、大道工区で縄文時代と弥生時代の遺物包含層、金池工区で中世の並行する2条の溝が確認され、本調査が必要となった。

本書はこのうちの金池工区で確認された東大直道遺跡B地区の調査報告書である。



(2) 調査の経過

調査対象となった地区は上野台地の北裾に沿った幅約20m、長さ約130mの約2600㎡である。

発掘調査は、まず東西に細長い調査区を長軸方向に半分に分け、溝の検出された台地寄りの南側半分の遺構検出を行った。その結果、調査区の東側では、中世の遺物包含層が確認され、調査区の中央付近から西側で、試掘調査で確認された2条の溝とさらに溝1条が検出された。

こうして、検出した遺構や遺物包含層に対する調査は、遺物包含層の掘下げから開始した。その結果、遺物包含層の下位から西側で検出された溝の続きが検出され、両者には明らかな時期差があることが判明した。また、3条の溝も交差している部分があり、土層観察の結果、時期差があることも判った。さらに、一番北側の溝は、出土遺物から、先のふたつの溝とも時期が異なることも確認できた。これらの時期の異なる3条の溝は、古い順にSD1・SD2・SD3と命名した。その他、弥生時代後期の土坑も1基検出され、SKIとした。

以上のような経過で、調査区内で遺構や遺物包含層の調査を終了したが、全体の地形は南から北に傾斜しており、調査区北隅では泥炭状の青灰色の泥層が広がっていることが判明した。この層は、周辺を試掘調査している大分市教育委員会によると、無遺物・無遺構であることが判っている。そこで、調査は、この表土を除去した南側半分はその範囲を留めることにした。

(3) 調査の体制

東大道遺跡B地区の調査は以下の体制で実施した。

調査主体 大分県教育委員会

調査総括 山本 芳直 (大分県教育庁文化課長)

伊藤 正行 (大分県教育庁文化課参事兼課長補佐)

清水 宗昭 (大分県教育庁文化課参事兼課長補佐)

調査担当 坂本 嘉弘 (大分県教育庁文化課埋蔵文化財第2係主幹)

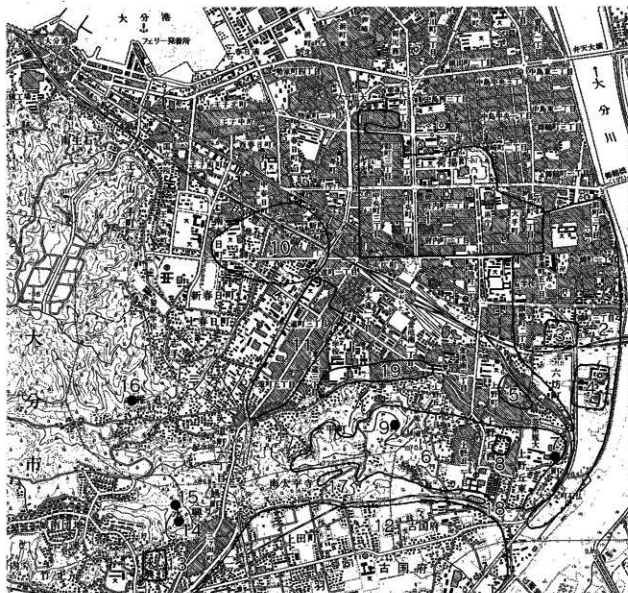
五十川雄也 (大分県教育庁文化課埋蔵文化財第2係嘱託)

2. 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

瀬戸内海の西端、別府湾の南側に広がる大分平野は、由布山の麓に源を発して東に流れ、別府湾に注ぐ大分川の沖積により形成されている。しかし、標高約30m～40mの丘陵がこの平野を分断し、幾つもの小地域をつくりだしている。

東大遼遺跡B地区のある場所も、こうした小地域のひとつで、東は大分川が流れ、北は別府湾が広がり、西は高崎山から続く丘陵地帯となっており、南は西から東に延びる上野台地で遮断されている。そして、西側と南側の丘陵からは、長沙門川をはじめとする小河川が流れ、低湿地を形成している。



第2図 東大遼遺跡と周辺の遺跡

1. 府内城下町跡 2. 中世大友府内城下町跡 3. 大友氏館跡 4. 万寿寺跡 5. 若宮八幡宮遺跡
6. 上野遺跡群 7. 大塚塚古墳 8. 上ノ原大友氏館跡 9. 飯盛塚古墳 10. 東田堂遺跡
11. 大道桑理跡 12. 古国府遺跡群 13. 永興遺跡 14. 弘法穴古墳 15. 千人塚古墳 16. 古宮古墳
17. 南太平寺横穴墓群 18. 岩屋寺横穴墓群 19. 東大遼遺跡

現在は、市街化と埋め立て工事が進み、旧地形を見ることは出来ない。しかし、明治年間(の5万分の1の地図を見ると、外堀で囲まれた府内城と、それから郊外に延びる街道筋以外に人家はなく、水田となっている。遺跡が存在していた頃の景観は、別府湾沿いに東西に砂丘があり、その後背部には低湿地が広がる。そして、人々が居住可能であったのは、こうした地形の中の微高地や丘陵沿いの部分であったと想定できる。

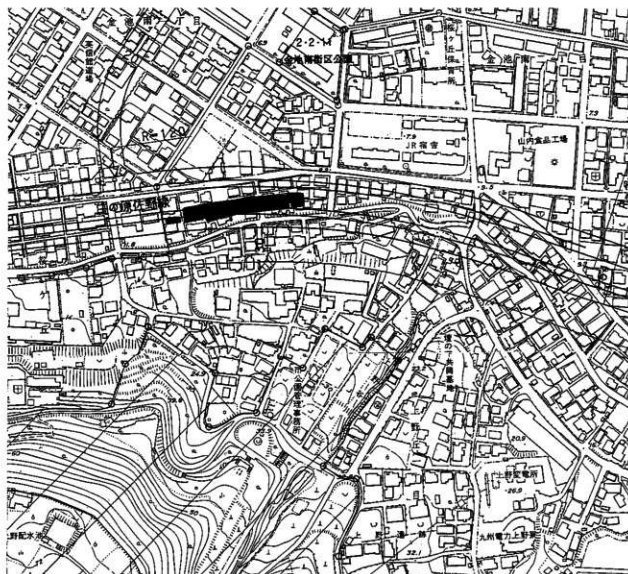
東大道遺跡B地区はこうした立地の中で、上野台地の北側の裾に形成された遺跡と言える。

(2) 歴史的環境

東大道遺跡B地区のある大分平野は、豊後国と呼ばれた古代から現在に至るまで、大分の政治経済の中心地である。このため、残されている遺跡も、この地域のみならず、大分の歴史を語る上で重要なものが多い。

旧石器時代の遺跡は、上野台地の西部にある庄の原遺跡で、九州横断道路建設に伴い調査を行い、ナイフ形石器や剥片尖頭器などが出土している。このうち、ナイフ形石器の一部には研磨痕のあるものも認められた。

縄文時代の遺跡も庄の原遺跡で早期の押型文土器や晩期の無刻目突帯文土器が出土しているほか、大分川の河床から縄文時代前期の礫式土器、中期の瀬戸内系土器である新元式土器、後期の磨消縄文土器・晩期の刻目突帯文土器が多量に出土しており、石棒や土偶も採集されている。



第3図 東大道遺跡B地区と周辺の地形 (1/4000)

弥生時代の遺跡は上野台地上にも中期から後期の集落遺跡がある。その一方、大分駅西側の尾沙門川沿いの微高地にも、弥生時代後期の遺跡である東田室遺跡などある。この他弥生時代後期の遺物は、大分川の河床からも採集されており、大分川の対岸の下部遺跡群では前期から後期にかけての遺跡が調査されている。

この地域の古墳時代の遺跡は、平野部で明確な集落は確認されていない。しかし、この地域と密接にかかわるような立地を示す重要な古墳が3基存在する。まず、最古の古墳は、この地域の西側丘陵上にかつて存在した亀甲山古墳である。この古墳は、箱式石棺を主体部とするもので、前方後円墳の可能性が強いものである。石棺内からは、三角縁神獣鏡が出土しており、4世紀代のこの地域の首長墓と考えられる。

5世紀代の古墳としては、上野台地の東端部に立地し、大分川と対岸の下部地区の平野を望む。前方部は一部消滅しているが、全長は30m以上あり、主体部は箱形石棺とである。周辺には周溝も確認され、そこから、円筒埴輪も出土している。

7世紀代の古墳として注目されるのは、西側丘陵から流れる尾沙門川の流域の南側斜面に築造された古宮古墳がある。この古墳は、方墳であり、主体部は凝灰岩を割り貫いた石椁式石室で、南に開口している。この古墳の形態や時期などから、その被葬者は、壬申の乱で活躍した、「大分君惠尺・惟巨」と想定され、現在国指定史跡になり、整備されている。

8・9世紀は上野台地の南側の平野に、国府や国分寺が築造されるものの、上野台地東端の、この地域を見下ろす場所に上野廣寺と呼ばれる礎石建物が建立され、百済系単弁軒丸瓦が出土している。また、同時期の遺跡として、台地先端部には竜王畑遺跡があり、掘立柱の大型建物や溝が整然とした状態で検出され、国司クラスの居館跡と考えられている。

中世になると、大分川の西側の自然堤防上に「市」や「万寿寺」を中心とした町屋の形成が始まる。この町屋は、15・16世紀の豊後の守護大名である大友氏の中心として発展し、16世紀後半にはキリシタン大名である大友宗麟による南蛮貿易の都市として繁栄する。しかし、1587年に薩摩の島津氏の侵略を受け、滅亡する。その後、一時復興するものの、豊巨秀吉により、大友氏は改易され、この中世の府内町は消滅する。

そして16世紀末には、豊後国は小藩分立となり、17世紀初頭には、府内藩として現在の府内城を中心とした城下町が整備された。その後、江戸時代を通じて府内藩の中心として栄え、明治時代を迎え、大分県の県庁所在地の大分市として発展してゆく。

第2章 調査の成果

1. 調査の概要

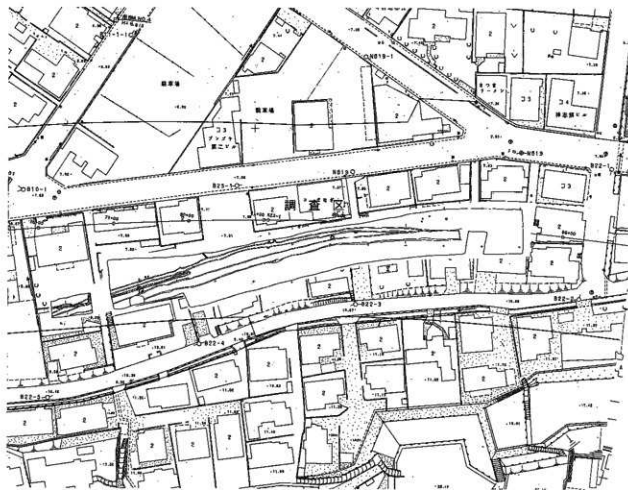
(1) 遺構の配置

東大遺跡B地区は、現在金池南町1丁目であるが、明治の地輪図によると、大字大分字千年田にあたる。調査区は、道路建設に伴う発掘調査のため、東西に細長く、その範囲は、東西約130m、南北約30mである。確認調査の結果、調査範囲の北側は、水分を多量に含んだ青灰色粘土層が広がっていることがわかっていった。このため、実際に発掘調査を実施したのは、確認調査で検出した溝状遺構が展開する南側半分となった。

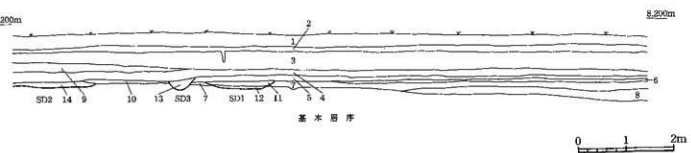
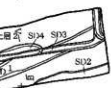
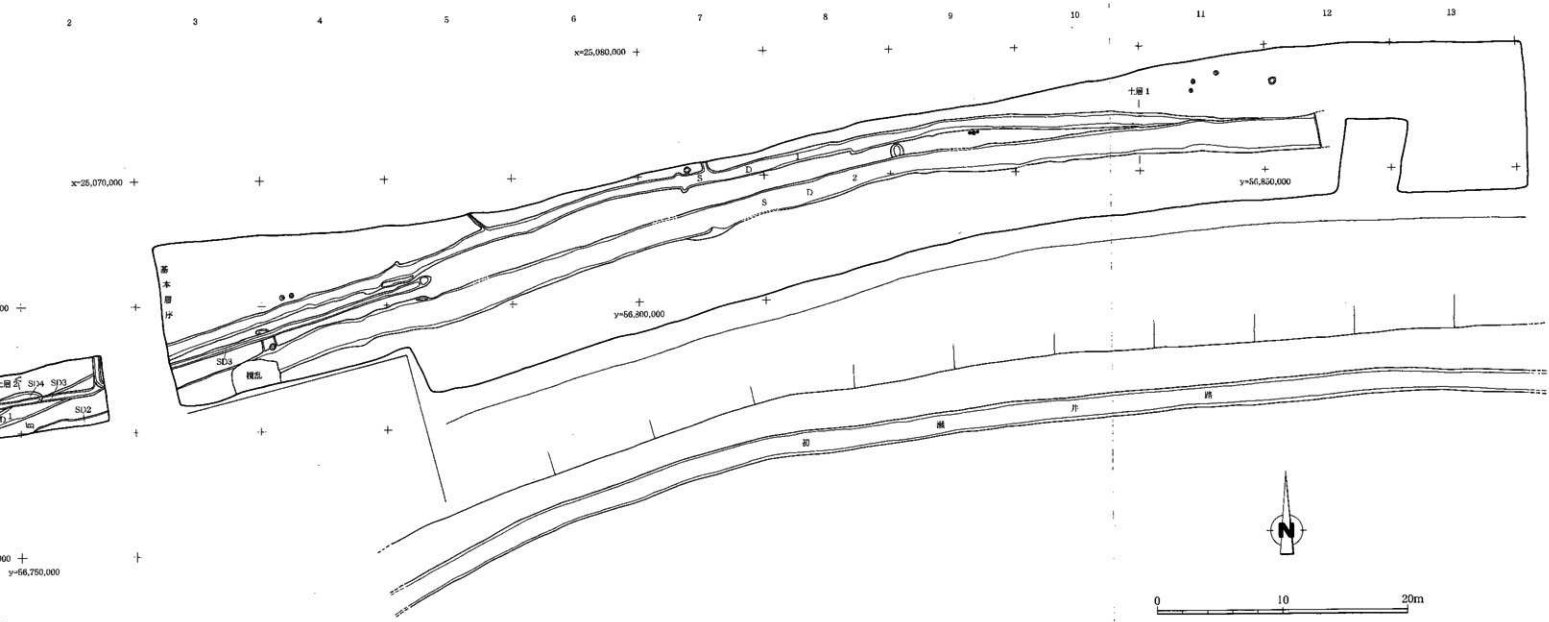
調査の結果、検出された遺構は、弥生時代後期中葉の土坑1基とはほぼ同時期の上野台地の壁に沿って東西に伸びる溝2条、9～10世紀頃と考えられる弥生時代の溝と同じ方向に伸びる溝1条を調査した。その他、明確な遺構は確認できなかったが、調査区の東端で、16世紀後半の遺物包含層を調査した。本調査区から出土した遺物の大部分は、この包含層からの出土であり、東に約2km離れている中世大友府内城下町との関係が目玉される。

(2) 基本層序

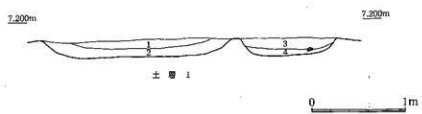
土層は調査区の南北方向の壁で確認し、全15層に分層した。1層は現代の耕作土である。2層は鉄分を多く含



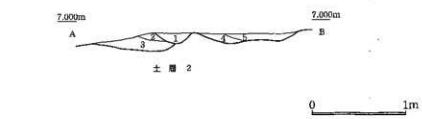
第4図 東大遺跡B地区の調査区



- 基本層序
- | | | |
|------------------|-------------------------|---------------------------------|
| 1層-灰褐色 粘質 しまり強い | 6層-灰褐色 粘質 しまり強い | 11層-暗灰茶褐色 粘砂質 (SD1埋土) |
| 2層-明黄褐色 粘質 しまり強い | 7層-灰茶褐色 粘質 しまり強い | 12層-灰白色 砂質 しまり強い |
| 3層-黄灰色 粘質 しまり強い | 8層-暗灰褐色 砂粘質 | 13層-暗灰白色 粘砂質 しまり弱い (SD3埋土) |
| 4層-暗灰褐色 粘質 しまり強い | 9層-暗灰褐色(6層より暗) 粘質 しまり強い | 14層-灰褐色(6層より暗) 粘質 しまり弱い (SD2埋土) |
| 5層-灰褐色 粘質 しまり強い | 10層-灰黒褐色 粘砂質 しまり強い | |



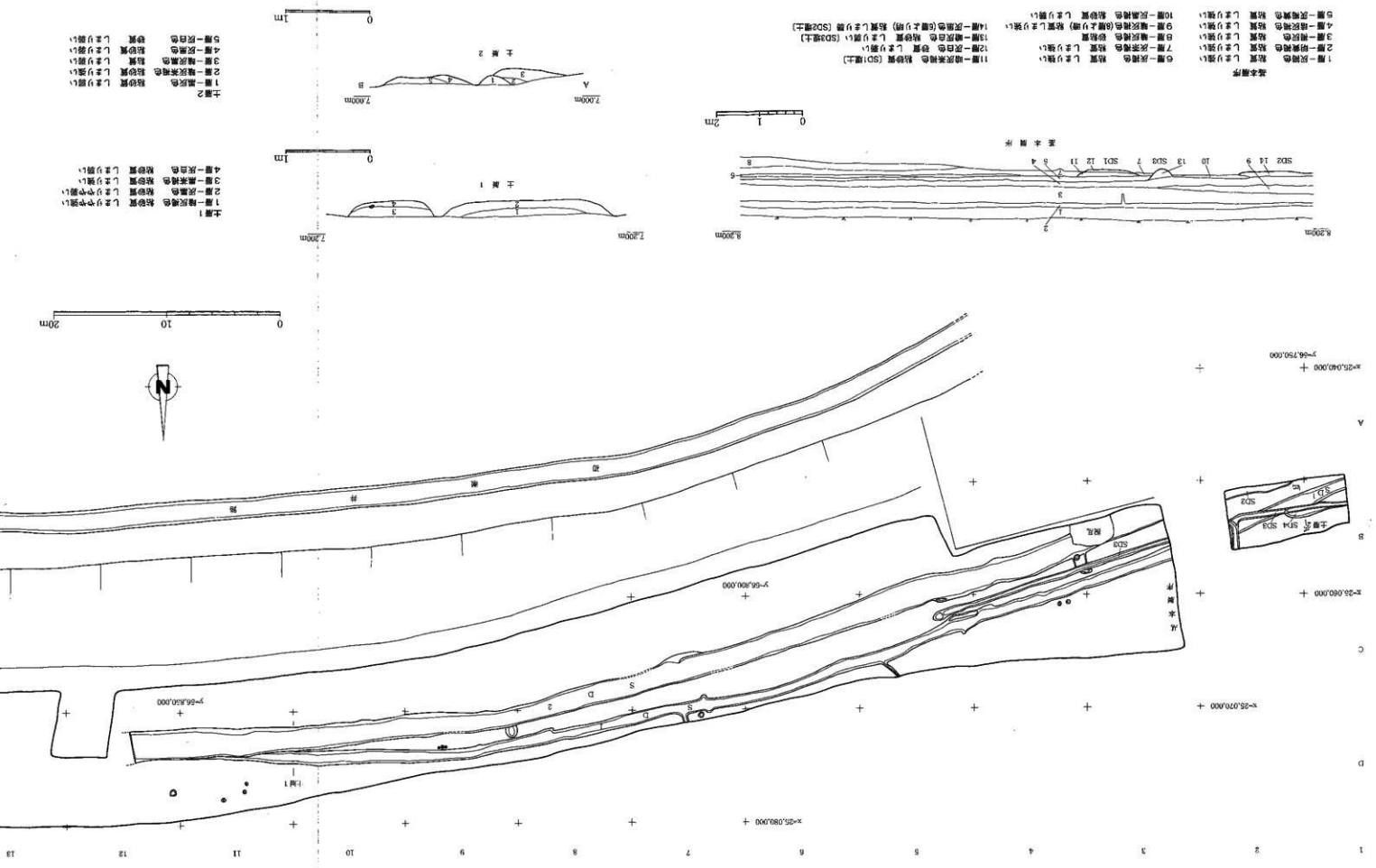
- 土層 1
- | |
|---------------------|
| 1層-暗灰褐色 粘砂質 しまりやや強い |
| 2層-灰褐色 粘砂質 しまりやや強い |
| 3層-黒茶褐色 粘砂質 しまり強い |
| 4層-灰白色 粘砂質 しまり弱い |



- 土層 2
- | |
|--------------------|
| 1層-黄灰色 粘砂質 しまり強い |
| 2層-暗灰茶褐色 粘砂質 しまり強い |
| 3層-暗灰褐色 粘質 しまり強い |
| 4層-灰褐色 粘砂質 しまり強い |
| 5層-灰白色 砂質 しまり強い |

第5図 東大道遺跡B地区の遺構配置と土層図

第5図 東大道路日地区の遺構配置と土層図



んでおり、近現代の耕作面である。3・4・9層は埋土状況から整地した層であり、3・9層に含んでいる土層から中世以後の整地と思われる。5・10層は13層（SD3）に切られる。13層は4層に切れ、5・10層を切っている。3号溝は4層より古く、5・10層より新しい。10層についてはその堆積状況や埋土から自然堆積層と推定される。10層は14層である2号溝を切り、13層（SD3）に切られる。そのことから、3号溝は2号溝より新しい。よって古代以後ということになる。6・7層に関しては、7層は11・12層（SD1）に切られている。1号溝は出土遺物より、弥生時代後期に帰属することから、7層より下で堆積している層は弥生時代以前ということになる。8層は自然堆積層である。

2. 弥生時代の遺構と遺物

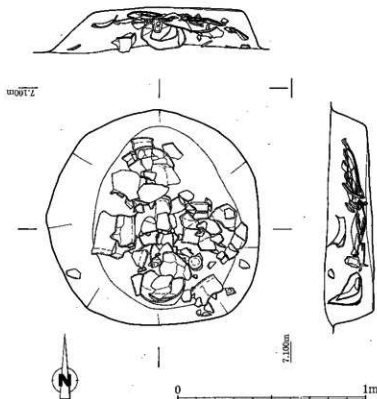
(1) 土坑（SK1）

調査区の中央に位置する。平面形態はほぼ円形プランの土坑である。その北側をSD2に若干切られる。規模は南北軸1.03m、東西軸1.13m、深さ0.23mである。埋土はレンズ状に2層に分層できた。下層は黒褐色粘質土で、上層は灰褐色砂質土である。土坑内から弥生土器の甕形土器と壺形土器が6個体出土し、その上面から姫島産黒曜石の原石も検出された。

1) 土器

1は、胴部最大径に比較し、口縁部が小さいため、甕形土器と考える。外反する口径は12cmで、胴部最大径は23cmを計る。口縁部は撫でにより丸く仕上げられ、器面全体も撫で仕上げである。特に内面は篋状の調整具で横撫でされており、その痕跡が残る。色調は、外面が茶褐色、内面は黒褐色である。胎土には角閃石や斜長石が観察される。

2は、口径14cm、器高40.5cmの甕形土器である。口縁部は外反し、外端部は肥厚して尖る。口唇部は凹縁状にくぼむ。くびれる頸部には断面台形の突帯が一条巡り、その上面には罫目原体による刻み目が斜めに加えられ



第6図 東大道遺跡B地区SK1 実測図

ている。胴部最大径は中位にあり約26cmを計る。底部は平底である。器面調整は、刷毛口であるが、全体的に粗い。外面は、全面縦方向の刷毛目調整であるが、胴部最大径付近の斜め方向の刷毛目とその下位の底部までの刷毛目は特に粗い。内面は、口縁部周辺のみ横方向の刷毛目であるが、その後撫でて仕上げられている。色調は明褐色であるが、底部近くは黒色斑がある。胎土には角閃石や斜長石を含む。

3～7は寛形土器である。3は外反する口縁部の内頸部が鋭角的に屈曲し、口縁端部が跳ね上り状になる。口径は、19cmで、胴部最大径は21cmである。器面調整は口縁部周辺が横方向の撫でて、胴部も撫でて仕上げである。色調は明褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含む。

4の外反する口縁部の口径は21cmで胴部最大径とほぼ同じである。器面調整は、口縁部周辺と胴部内面は横撫であるが、胴部外面は縦方向の短い単位の刷毛目調整で、胴部内面の頸部下位は横方向の削り状の調整である。色調は茶褐色で、胎土に石英を多く含むほか、角閃石や斜長石も認められる。

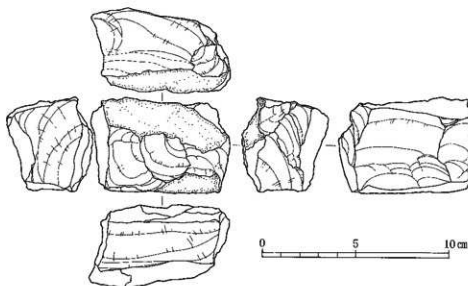
5の口縁部は外反し、外端部は尖る。口径は21cmで、胴部最大径は23cmである。器面調整は胴部外面が、不規則な粗い刷毛目のほかは、横方向の撫でて仕上げられている。色調は黒褐色で、胎土に白色粒を多く含むほか砂粒も目立つ。

6は口径20cm、器高32cm、胴部最大径23cm、底部径5.5cmのほぼ完形品である。器面調整は縦方向の刷毛目を基本としているが、胴部外面の上位と内面は斜目方向である。口縁部外面は刷毛目のあと横撫でされている。色調は明褐色で、胎土に角閃石や斜長石が認められる。またこの土器は、煮炊きで使用された痕跡が著しく、底部周辺は2次焼成で変色し、その上位にはススが附着している。

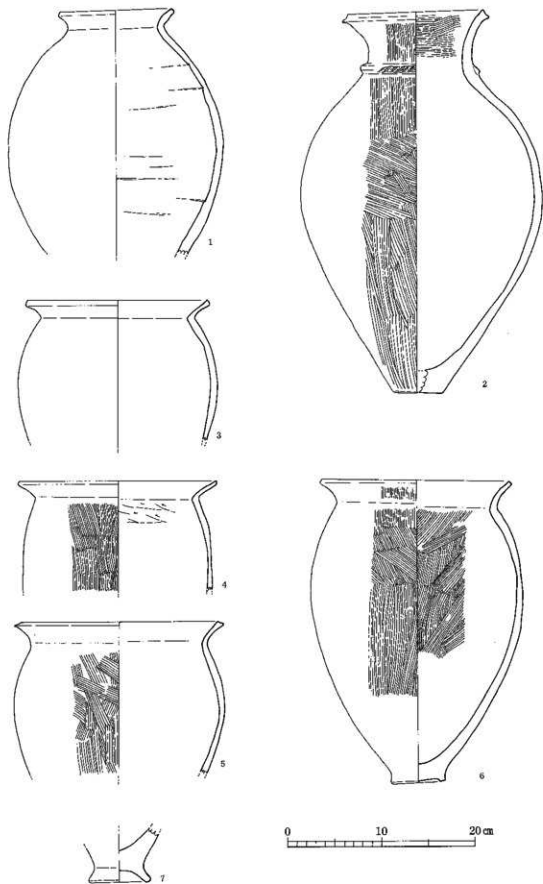
7は端部が張り出す底部のみの資料である。底径は6.5cmで、上げ底である。器面調整は撫でて仕上げで、外面は2次焼成を受け、赤褐色で、内面は黒褐色である。胎土に角閃石や斜長石を含む。

2) 石器

土坑内から姫島産黒曜石が出土した。この黒曜石は長さ7.4cm、幅5.0cm、厚さ4.6cm、169.5gで、全体的に直方体に仕上げられている。節理面も多く、石材としての質も良くない。また、剥片を連続的に剥ぎ取った痕跡もなく、観察される剥離面は、形を整えるためのものと考えられる。



第7図 東大遺跡B地区SK1出土石器実測図



第8图 东大道遗址B地区SK1出土土器实测图

(2) 溝

1) SD1

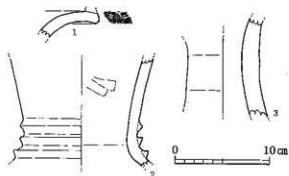
弥生時代の溝は2条検出された。SD1は調査区の東側を除く全域で検出した。西から東に向かって延びる上野台地の北側の裾を採取するように、地形に沿って屈曲し、東西に延び、溝の中央付近で北側に細い溝が2本枝分かれしている。検出された規模は、長さ90+ α m、最大幅1.2m、深さ0.1mを測る。埋土には砂質土の堆積を確認し、流水の痕跡が認められる。

出土した土器は、第9図に図示した。これらは、いずれも近接して出土した。1は外面に櫛指波状文のある複合口縁の壺形土器と考えられる。2は1と同じ器形の頸部と考える。器面調整は、横方向の撫で仕上げで、頸部に断面三角形の突帯が3条認められる。1・2とも明褐色で、胎土に角閃石や斜長石を含み、同一個体の可能性が高い。3は、筒状の土器であるが、器台の可能性が高い。明褐色で、胎土に角閃石と斜長石が認められる。

2) SD4

この溝は、調査区の西端で検出された。規模は長さ5+ α m、幅約0.3m、深さ約0.2mを測る。埋土には砂質土を確認し、流水の痕跡が認められる。方向はSD1と同じであるが、SD3に切られる。

出土した遺物は、第10図に示した底部1点のみである。底径約7cmで器面調整は横撫での壺形土器と考える。形態は上げ底状になっており、この地域独特である。

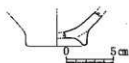


第9図 東大道遺跡B地区SD1出土土器実測図

(3) 遺物

1) 後漢鏡片

第5図に図示した、近世水田の床土の下部から出土した。小片ではあるが、平縁の後漢鏡片と考えられ、外側から複線鋸齒文、圓縁、鋸齒文、櫛歯文が認められる。こうした遺物は、これまで、大分県下では弥生時代後期後半から終末の集落跡や墓地から出土している。今回採集されたこの鏡片も、SD1やSK1の時期に伴う可能性が高い。



第10図 東大道遺跡B地区SD4出土土器実測図

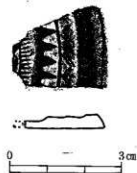
2) 炬高産黒曜石原石

第12図に図示した炬高産黒曜石は、すべて古代と考えられるSD2出土である。しかし、その時期にはこの黒曜石の流通はない。ここでは、SK1出土の黒曜石同様、弥生時代後期に帰属する遺物として報告する。

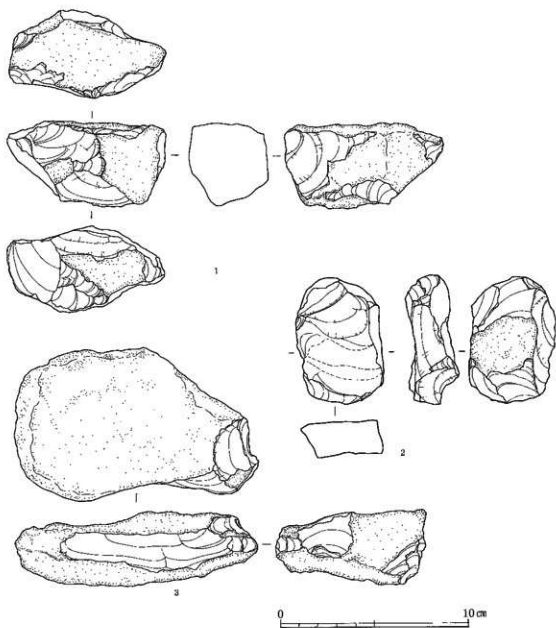
1は自然面や節理面を多く残す資料で、全体的に直方体に整形した感がする。石器作成のため、連続的に剥離した跡は認められない。長さ8.45cm、4.55cm、4.7cmで、164gである。

2は今回出土した4点の資料の中で最小である。長さは8.7cm、4.6cm、厚さ2.65cmで、重さは76.5cmである。自然面(節理面)も見られるが、左右両側片は、横長割片を連続的に剥離した可能性が高い。

3は今回出土した4点の資料の中で最大である。13cm、8.1cm、3.95cmで、重量は373.2gである。表面のほとんどは、自然面で覆われており、石核ではなく、原石と言える。



第11図 東大道遺跡B地区出土後漢鏡片実測図



第12圖 東大道遺跡B地区出土短島産黒曜石実測図

3. 古代の遺構と遺物

(1) 遺構

古代の遺構は、SD2とした調査区のはほぼ中央部を東西に延びる溝である。その方向は、弥生時代の溝であるSD1と類似し、上野台地の裾に沿う感がある。検出された規模は、長さ95+αm、最大幅2.5m、深さ0.15mを測る。他の時期の溝に比較すると大きい。溝の内部からは、準大前後の礫やそれに混入して土器が流れ込んだ状態で出土した。埋土には砂質土を確認し、流水の痕跡が認められる。

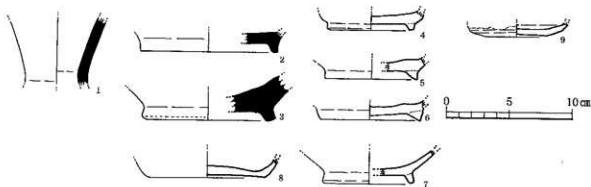
(2) 遺物

1は脚の可能性もあるが、ここでは長頸壺と理解する。器面は横方向の撫で調整で、青灰色を呈する須恵器である。2は底径11cmの高台付きの須恵器の坏である。色調は灰色をしている。3は、高台付きの長径壺類の底部と考えられる。底径は約11cmである。黒灰色の須恵器である。

4は高台付きで底径7cmの、土師器の坏である。器面調整は横撫でで、色調は赤褐色を呈し、胎土に角閃石と斜長石を含む。5は高台断面が三角形を呈する土師器の坏である。径は7.4cmで、内面は黒褐色、外面は赤褐色である。6も高台断面が三角形を呈する土師器の坏である。径は7cmで、内面は黒褐色、外面は赤褐色である。5・6ともに胎土に角閃石や斜長石を含む。7は、内面が黒色を呈する内黒土器である。底部の径は7.4cmで外面は茶褐色をし、胎土に角閃石や斜長石を含む。

8は底部の径が9.4cmの大型の坏である。器面調整は撫でであるが、磨滅している。色調は茶褐色をし、胎土に赤色粒を多く含む。

9は茶色がかかった青磁の皿で、4.6cmである。上葉は底部付近にはかけられておらず、須恵質の地肌が見えている。この部分には、墨書の可能性が強い痕跡が認められるが、読むことはできない。



第13図 東大道遺跡B地区SD2 出土遺物実測図

4. 中世の遺物

(1) 出土状況

調査区の東端部で16世紀後半の遺物包含層を調査した。この遺物包含層は、近世の水田層の下位に形成されており、その厚さは、20～30cmであった。出土する遺物は、京都系土師器・輸入陶磁器・陶器・瓦・煙管・土鏝などがあるが、調査中には獣骨片も認められた。

包含層を除去後に遺構検出面である灰茶褐色砂質土の上上で、遺構検出作業を行ったが、まったく検出できなかった。

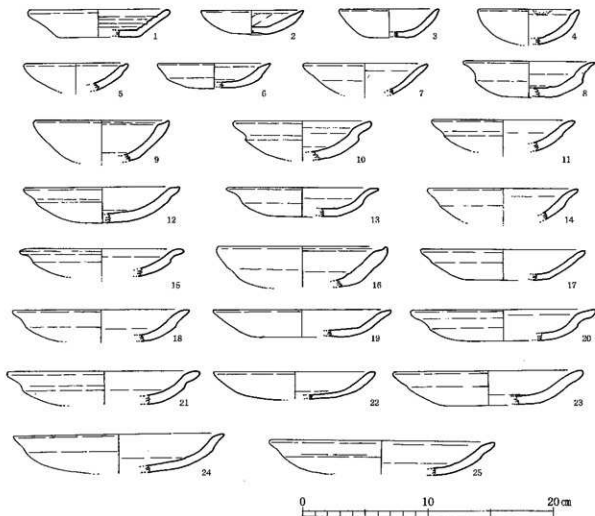
(2) 遺物

1) 土師器

包含層から出土した遺物で、最も多いのが、土師器である。第・図に図示したものが、その代表的なものである。これらの土師器のうち、ごく僅かを除き、そのほとんどが、京都系土師器と呼ばれる非ロクロ系土師質土器である。

1は唯一のロクロ系土師器である。復元口径は11.4cm、2.2cm、底径6.4cmで、糸切り底である。器面は、外面が横撫であるが、外面は調整工具により、深い沈線がラセン状に巡る。赤褐色で角閃石や斜長石を含む。15世紀後半から16世紀前葉の在地的な土師器として理解されている。

2～25は京都系土師器であるが、これらは大きさに著しい差はあるものの、使われる粘土、造る技術などに共



第14図 東大道遠跡B地区包含層出土土師質土器実測図

通するものがある。すなわち、焼成後に白茶色を呈する粘土を使用する。このため、2が暗灰色、16・21が黒褐色、12・14・18・20が明褐色を呈する以外は、白茶色をしている。また、作成する際は、粘土帯を手探ねで伸ばし、形を整えている。特に、口縁部外面は、強い指撫で行う特徴があり、8・10・15・18・20・21はその技法のため、口縁部外部が外反するような形態になる。内面も、底部と口縁部の屈曲部分を横撫でし、最後の処理は口縁部外部に向けて、撫で上げている。

また、近年の中世大友府内城下町跡の調査では、京都系土師器は5～6の法量に分化していることが判っている。そこで、包含層出土の京都系土師器の法量を見ると、2～6は8～9.1cmで、7～11は10～11.4cm、12～14は12.1～12.4cm、22・15～16は12.9～13.6cm、18～21・23は14.1～15.6cm、24・25は17～18cmで大きく6法量に分かれることが判る。

こうした京都系土師器の帰属する時期は、中世大友府内城下町跡や近世府内城下町跡の調査で明らかになって来つつある。それによると、この土器は、大友氏が京都の室町政権と関係を持つ中で、その儀礼である「式三献」を1537年頃に導入した際に、豊後の府内町に伝播し、大友氏の家臣を通じて県内に広がったと考えられている。その後、この京都系土師器は、形態変化を遂げながら、近世初頭まで存続する。

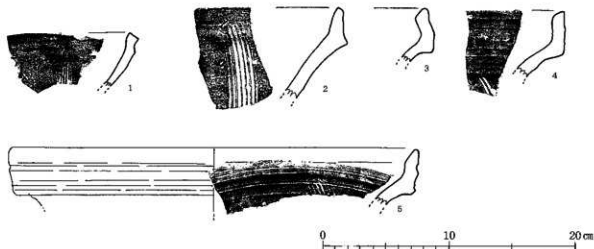
その初期のものは、22のように、底部の器壁が薄く、口縁部部の外面の撫でが少ない。次の段階になると、20のように、器壁が厚くなり、口縁部外面の撫でが明確になる。そして、16世紀末葉になると、9・12・16に見られるように、器壁が極めて厚くなる。

1の在地系土器と京都系土師器の関係は、中世大友府内城下町跡の状況を見ると、両者が共存する場合は、初期の京都系土師器の時期で、それ以降は、両者が同じ遺構から一緒に出土することはない。

2) 摺鉢

1は、器面が灰黒色をする摺鉢である。口縁部は横方向の強い撫で、内面に柵目が見られる。焼成は甘く、次に報告する2～5の備前焼の摺鉢と比較すると軟質である。2は口縁部が屈曲して直立し、外面は平坦な撫で仕上げである。3の口縁部は、屈曲し内傾する。その外面は、撫でであるが、門縁状のくぼみが形成されている。4の口縁部も屈曲し直立する口縁部であるが、外面は平坦である。5は口径34cmの摺鉢である。屈曲し直立する口縁部外面には、凹線や沈線が巡る。

以上の摺鉢のうち、2～5の備前焼の摺鉢は、近年の編年研究で見ると、2・4は15世紀後半で、3・5は16世紀代に位置付けられている。



第15図 東大道遺跡B地区包含層出土摺鉢実測図

3) 輸入陶磁器陶器

1～15は、中国産の青花である。1は小野正敏⁹⁾分類のC群碗（いわゆる蓮子碗）の口縁部で、16世紀前半代に比定される。3～5はD群碗（いわゆる機頭心碗）の口縁部、6は底部の破片で、16世紀後半代に比定されるものである。7・8はF群碗の可能性のある破片で、16世紀後半から末に比定される。8の見込みに梅樹文が描かれている。9は漳州窯系の青花碗と思われる胴部破片である。16世紀後半代に比定される。10～13はB1群皿で、16世紀前半代の製品。13の見込みにはアラベスク文と梵字文が描かれる。14はE群の皿で、製作年代は16世紀後半代に比定される。他の製品と比較して、薄手で文様の描き方も鮮明である。見込みには龍文が描かれている。15は口縁部と胴部の境に蓮弁文を描く合子あるいは小型壺である。胴部外面と口縁内外面に施釉が認められるが、胴部内面は露胎となる。16世紀代の製品。なお、中国産の青花は9が漳州窯系の製品である他は、すべて景德鎮系のものである。

16～22は中国産の青磁である。16は鎮蓮弁文碗の胴部破片で、12世紀後半から13世紀代に比定される。17は雷文帝青磁碗の口縁部破片で、外面に雷文と蓮弁文、内面に花文を片彫りによって施している。14世紀後半から15世紀前半代の製品である。18は見込みに片彫りによる花文を施す皿の破片で、外底部は蛇の目状に輪割ぎしている。14～15世紀代に比定される。19は蓮蓮弁文（剣先蓮弁文）青磁碗の口縁部破片で、16世紀前半代に比定されるもの。蓮弁文部を表現する直線と蓮弁先端部を表現する曲線は対応する部位としない部位が認められる。20・21は鉢あるいは壺で、いずれも14～15世紀代の製品である。このうち、21は口縁端部に口縁、内面に波状の片彫り文様が認められる。22は菊花形の皿で、小破片から口径等を復元しているため、復元値に誤差を生じている可能性もある。高台・台付部周辺は露胎となり、外底部は裏白である。器形や外底部の特徴から、景德鎮系の青磁製品で、16世紀後半代に比定されるものである。なお、以上の青磁は22が景德鎮系青磁である他は、すべて龍泉窯系の青磁製品である。

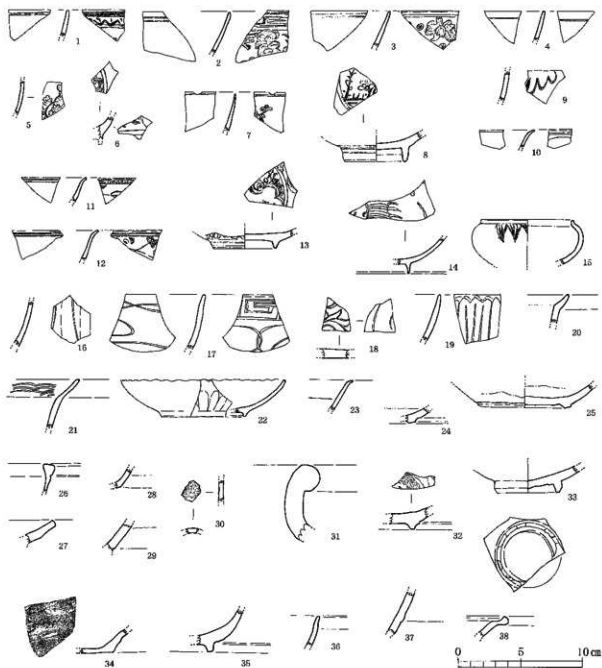
23～25は中国産の白磁である。23は口縁端部が外曲するタイプの白磁碗の口縁部で、12世紀代の製品である。24・25は削り出しにより断面方形の高台を作り出し、見込みと高台周辺および外底部を露胎とするタイプの白磁皿¹⁰⁾である。福建省・広東省などの中国南部で生産された製品と推定されている。16世紀中頃前後から日本列島内に搬入されている¹¹⁾が、豊後府内周辺では16世紀後半代に最も多く見られるものである。

26は焼締陶器の鉢の口縁部で、これも中国南部産と推定されるもの。近年、中世大友城下町跡で類例が増加¹²⁾しており、小破片ではあるが注意を払っておきたい資料である。27は器種・産地とも不明の製品で、鉢などの口縁部破片であろうか。胎土は灰褐色、釉は黒褐色を呈する。現状では、中国（南部？）産の16世紀代の製品と考えるのが最も妥当であろうか。28・29は小破片であるが、中国産大目碗の胴部下位の破片である。30は華南三彩の小破片で、残念ながら器種不明であるが、水注などの袋物である可能性が高い。外面には鮮やかな緑釉を施し、内面は露胎である。

31はタイノイ川窯系陶器四耳碗の口縁部破片である。わずかに残存する肩部外面に白化胚土（白泥）の塗布が認められる。

32～34は朝鮮王朝産陶器。32は小破片であるが、高台の形態や見込み部分に目跡が顕著に認められることから、朝鮮王朝産陶器碗と判断した製品である。33は高台・台付部以外の部位に灰青釉を施し、内底部は兜巾状になる。高台・台付部には5箇所以上の目跡が認められる。34は舟形鉢の底部付近の破片で、内面には叩き痕が認められる。32～34はいずれも16世紀代の製品である。

35は唐津系陶器碗で、高台周辺と外底部は露胎となる。外面は灰釉を施しているが、二次的な被熱を受け、表面が荒れている。1590～1610年代の製品である。36・37は瀬戸美濃産陶器の天口碗である。図示したものの他に、口縁部の小破片が出土している。38は瀬戸美濃産陶器の折縁皿の口縁部である。36～38はいずれも16世紀後半から末前後の製品と考えられる。



第16図 東大道遺跡B地区包含層出土輸入陶磁器実測図

- 註 (1) 小野正敏「15・16世紀の染付碗 皿の分類とその年代」(『貿易陶磁研究』No.2 1982年)
 (2) 田中克子「博多遺跡群出土の内底彫胎の磁器の一群について」(『博多研究会誌』第4号 1996年)
 (3) 柴田圭子「16世紀中華の輸入陶磁器の再評価—中岡・四国地方の遺跡を中心に—」(『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』2001年)
 (4) 高島 豊「戦国時代府内の貿易陶磁器」(『南振都市・豊後府内—都市と交易—大友氏館跡国指定記念事業中世大友再発見フォーラム 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001年』41頁)

4) 瓦

包含層から数点の瓦片が出土している。ここに図示するのは、縁辺の残る資料のみである。1は厚さ2.1cmで、凸面に縦方向の筋目が認められる。2は、厚さ1.9cmである。2点とも、縁辺は、荒撫でで調整されており、胎土に角閃石や斜長石・砂粒を含む。色調は灰青色を呈する。

5) 煙管

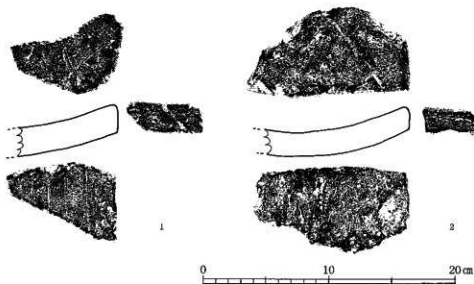
東大道遺跡B地区の16世紀後半を主体とする包含層から2点の煙管の雁首部が出土している。1は、ほぼ完形品の雁首部であるが、火眼はつぶれている。火眼の径は、約1.8cmはあると推定できる。2は羅字との小口部が欠損している。火眼は口径1.8cmで、細い首部との接合部には細い補強材を巡らせている。

6) 土鍾

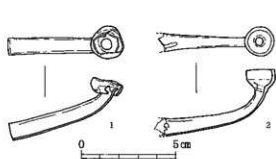
魚網鍾と考えられる土鍾は、包含層から4点出土している。いずれも紡錘形をしており、縦方向に穴があけられている。1は、両端部が細くなるタイプである。重さは一部を欠くが7.2gである。2は長さ4cm、最大径0.9cmで、重さは3.3gである。3は長さ5.2cm、最大径1.4cmで、重さは6.6gである。4は長さ5.6cm、最大径1.4cm、重さ11.0gである。いずれも、胎土に角閃石や斜長石を含み、明褐色をしている。

5. SD3

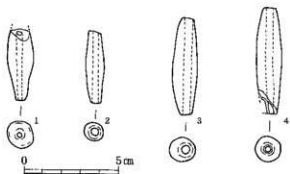
この溝は調査区の西側で検出した。規模は長さ約30+αm、最大幅0.5m、最大深0.25mを測る。埋土には砂質土を確認し、流水の痕跡が認められる。切りあい関係から4本の溝の中では一番新しい。



第17図 東大道遺跡B地区包含層出土瓦実測図



第18図 東大道遺跡B地区包含層出土煙管実測図



第19図 東大道遺跡B地区包含層出土土鍾実測図

第3章 まとめ

弥生時代

弥生時代の遺構として、溝が2条、土塙1基が検出された。特に、土塙からはほぼ完全な形をした壺形土器・甕形土器が出土した。また、溝は、上野台地の裾を巡るように掘り込まれており、台地から染み出る水を給排水するための施設と考えられる。

これらの遺構の時期は、出土土器から、弥生時代後期前葉と考えられる。特に土塙からまとめて出土した土器は、この地域の編年を考える上で重要である。また、土塙とその周辺から出土した姫島産黒曜石の石核や原石の時期も、出土状況から弥生時代後期前葉と考えられる。そうすると、この時期は、日本列島に鉄器が普及し始めたころであり、縄文時代の初めから九州各地に供給される姫島産黒曜石の最後の状況を示していると言える。

さらに、出土した後漢鏡片は、本来の位置を離れているが、これまで、大分市周辺で出土した例から見ると、弥生時代後期後半から終末に属する場合が多い。そうすると、周辺に弥生時代後期前葉から終末の集落跡があった可能性が高い。

古代（平安時代）

SD2とした溝からは、大きく2時期の遺物が出土している。すなわち、第13図に図示した底部のうち、1～3の須恵器は、8世紀代の可能性が高い。4～7は底部のみで、明確ではないが、7の上脚器は内黒土器で、11世紀代の可能性が高い。また、4～6は9・10世紀とも考えられる。特に注目すべき遺物として、青磁皿の輸入陶磁器があり、底の部分に墨書と推測できる痕跡が確認された。この土器は11世紀のものと考えられる。

調査した溝は、規模の差はあるが、弥生時代の溝とほぼ平行しており、上野台地の裾を意識した感じがし、同じ意図で11世紀頃に掘削されたと思われる。

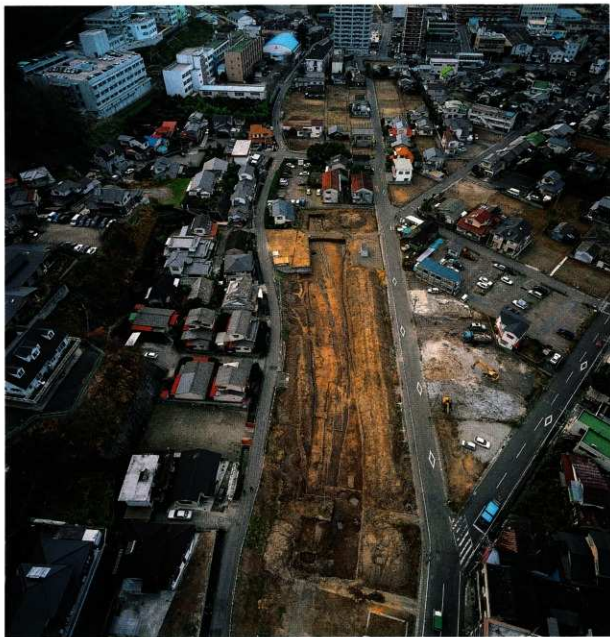
中世（戦国時代）

東大道遺跡B地区の調査で、包含層から出土した遺物の大半は16世紀後半～末のものである。この時期は、大友宗麟・義統の時代であるが、その中心地である「府内」は、この遺跡から、約2km東北に離れた位置にある。しかし、出土した遺物は、京都系土器器・備前焼の播鉢、南蛮貿易でもたらされた、中国や東南アジアの陶磁器、煙管・瓦など、量的には少ないが、質的には大友氏の「府内」で出上るものと大きく変わらない。



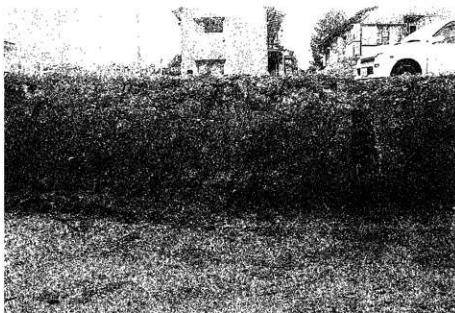
第20図 東大道遺跡B地区と周辺の小字名

写 真 图 版



東海道線B地区全景 (東側上空から)

東大道遺跡B地区
土層写真

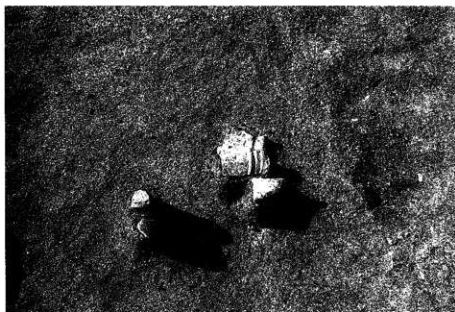


東大道遺跡B地区
SK1遺物出土状況(1)



東大道遺跡B地区
SK1遺物出土状況(2)





東大道遺跡B地区
SD1遺物出土状況

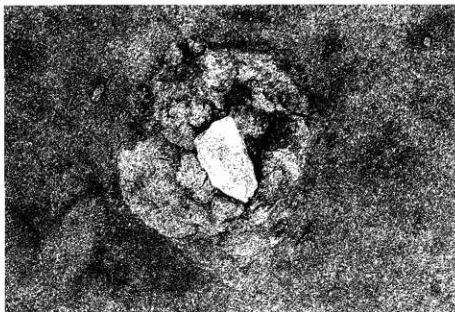


東大道遺跡B地区
SD2輸入陶磁器出土
状況



東大道遺跡B地区
短島産黒曜石出土状況

東大道遺跡B地区
姫島産黒曜石出土状況

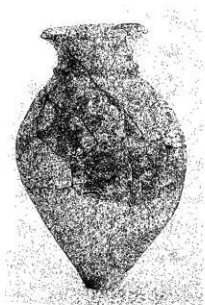
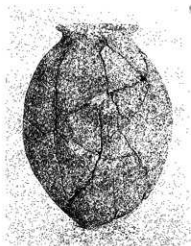
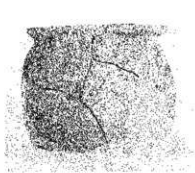


東大道遺跡B地区
姫島産黒曜石出土状況

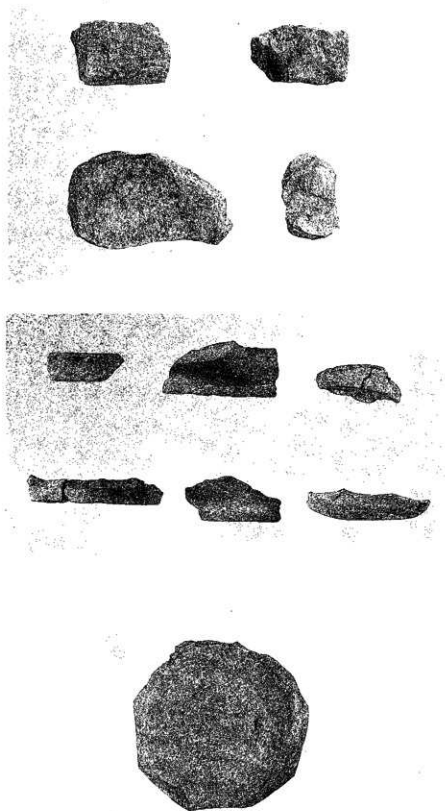


東大道遺跡B地区
後漢鏡片出土状況

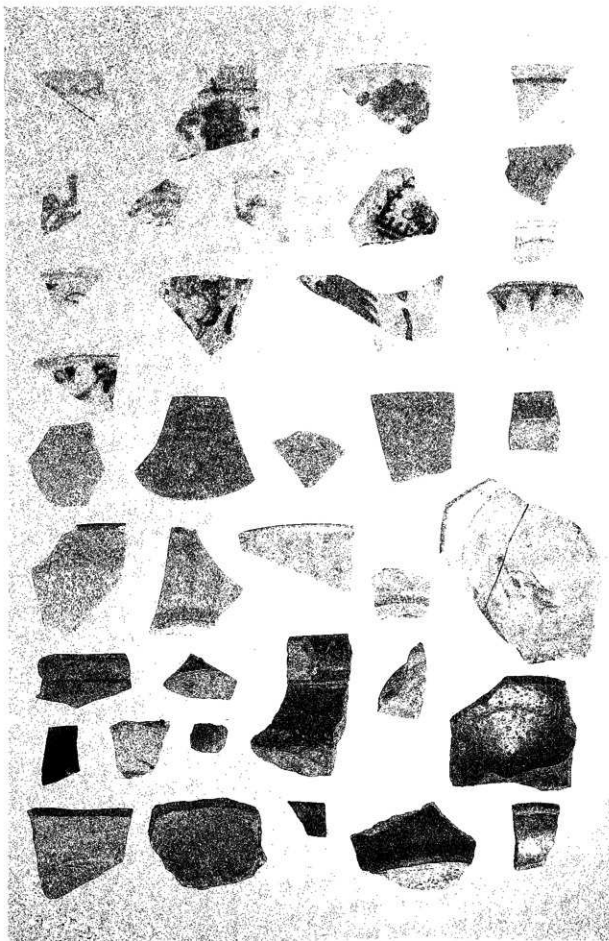




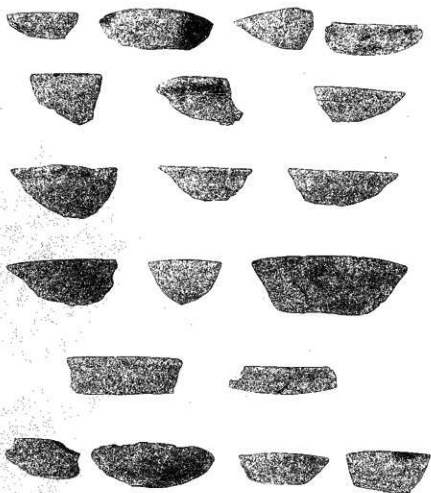
東大遺跡B地区出土弥生土器



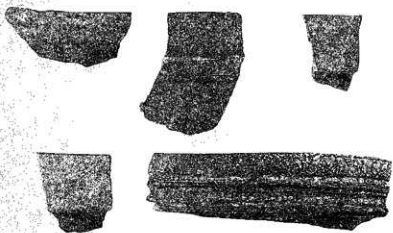
輸入陶磁器底部墨書



東大道遺跡B地区出土輸入陶磁器



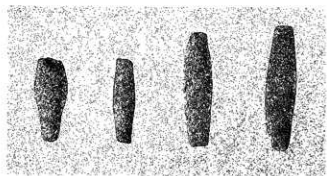
京都系土師器



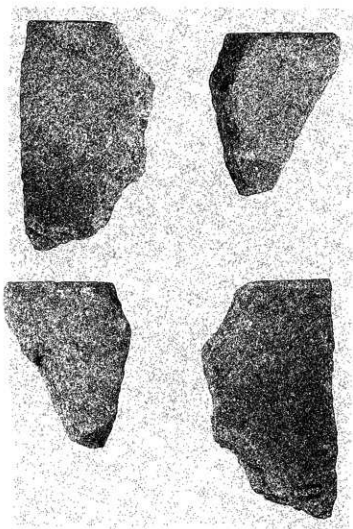
埴鉢



煙管



土罐



平瓦

東大道遺跡B地区包含層出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひかしおおみちいせきBちく						
書名	東大道遺跡B地区						
副書名	庄の原佐野線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査						
巻次	(1)						
シリーズ名	大分県文化財調査報告書						
シリーズ番	第145集						
編著者名	坂本嘉弘・吉田寛・五十川雄也						
編集機関	大分県教育委員会						
所在地	大分市府内町3丁目10番1号						
発行年月日	200年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ひがしおおみちいせき 東大道遺跡 B地区	おおいしおみちいせきみなもと 大分市金池南町 いちちよう目	442011	337-2	33° 13' 05"	131° 36' 05"	平成12年 10月26日 ～ 12月27日	道路建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
東大道遺跡 B地区	集落跡	弥生時代 後期 古代 戦国時代	溝・土坑 溝 包含層	弥生土器(壺・甕) 姫島産黒曜石石核 後漢鏡片 土器・墨書? 京都系土師器・播鉢 輸入陶磁器・煙管		大友氏城下 下町から西 に2km離れた 同時代の遺 跡	

東大道遺跡 (B地区)

庄の原佐野線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

平成14年3月29日

編集

発行 大分県教育委員会

〒870-0021

大分市府内町3丁目10番1号

TEL. 097(536)1111

印刷 日新印刷株式会社
